Careと住まい
の統合
オランダ

59

認知症の人のための共同居住の場としてデメンティアビレッジ

The "dementia village" that's redefining elder care | Yvonne van Amerongen

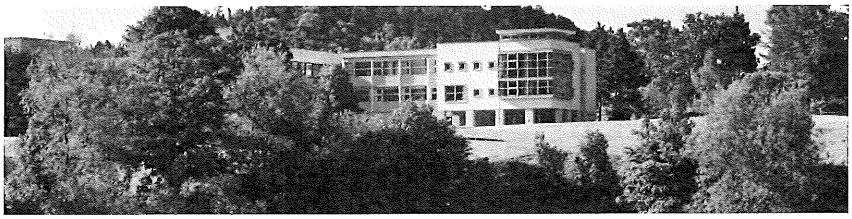
60

UNIVERSITY of STIRLING

MSC IN DEMENTIA STUDIES

UNIVERSITY OF STIRLING

認知症の人のための空間デザイン
Sterling University, Dementia Service Development Centreにおける研究成果から　三浦研京都大学教授による翻訳



61

英国スターリング大学
Dementia Service Development Centre

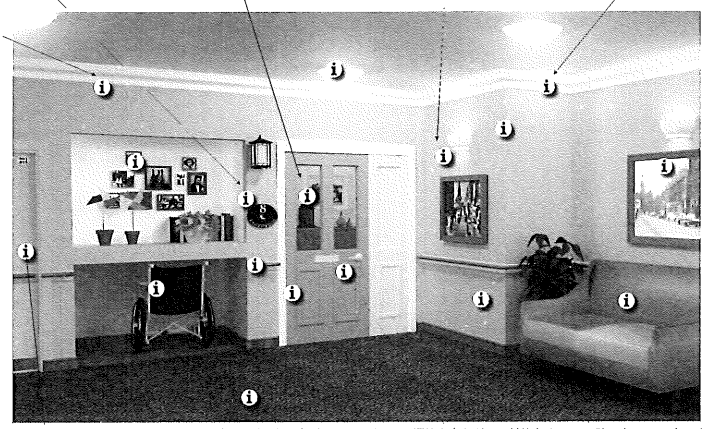
ユニットを区別するため、それぞれ異なる玄関ドアの色とする。

室内側が見えるようにドアにガラスパネルをつける。

廊下を見やすくするために壁にアップライトをつける。
明るいところと暗いところのまだらを作ってはいけない。

スポットライトは望ましくないが、植物など特定のものを強調する場合には使ってもよい。

家庭的な雰囲気にするために天井を折りあげる。



スタッフ用の部屋のドアは壁と同色にする。入居者が混乱しないように手すり、幅木やキックプレートもドアを横切って連続させる。サイン、ドアノブ、鍵は最小限で、できれば見えなくすることが望ましい。

床面、壁、ドア、幅木、天井の色は通路を見つけやすいように視覚的に30LRV以上のコントラストをつける。
大きな模様のカーペットや壁紙は避ける。

握りやすく、ドアに対比させたドアノブをおよそ1mの高さの位置に設置

壁の角にコーナーガードを設置する。ただし、家庭的な雰囲気を保つため、壁と同色か、透明なものとする。

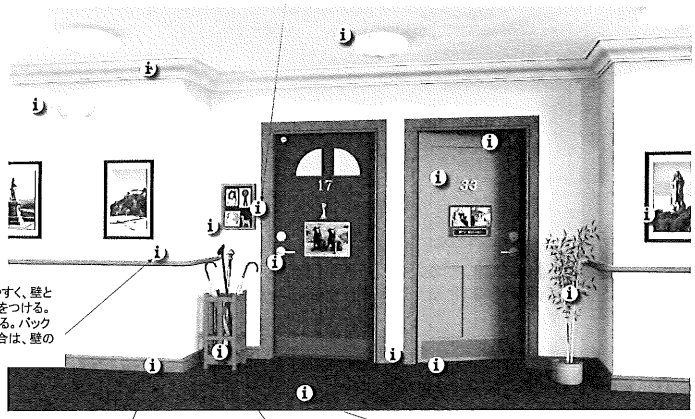
ユニット入口

62

廊下を家庭的な雰囲気にするために天井を折りあげる。

入居者の名前と写真などでドアを個別化する。ドアの色と覚えやすい室番号などを付ける。

年齢を考慮した写真を選び、記憶や会話を刺激する。写真は反射せず、光らないアクリルガラスのフレームに入れる。写真は床からフレームの下側まで1.2m程度の低い位置にする。



廊下の両側に握りやすく、壁と区別しやすい手すりをつける。手すりの高さ1mとする。バックプレートが必要な場合は、壁の色と合わせる。

カーペット、壁、ドア、幅木、台輪、天井の色はそれぞれ30LRVの差つける。色の区別は床の端部や、ドアのような重要な特徴のものを認識しやすくする。大きな模様の床材や壁紙は避ける。

傘立てや植物など個人のものを部屋の外側に置いて認知しやすくする

居室前は廊下を広げてアルコーブを設ける。
ドアは廊下をはさんで向かい合わさないほうがよい。

居室入口

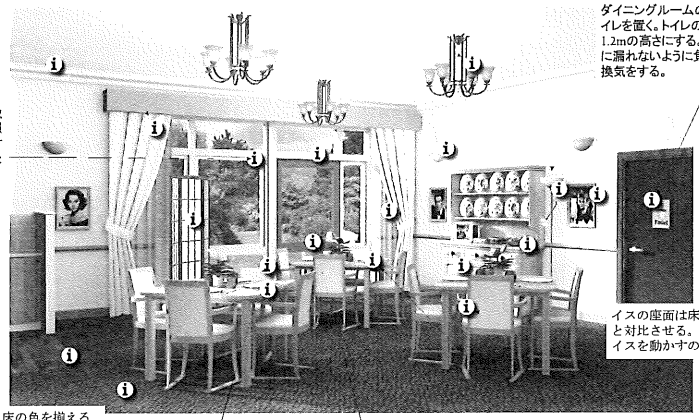
63

カーテンとレールが窓より大きいことを確認する。大きな模様のあるカーテン生地は避ける

複数のランプが付いたシャンデリア式の照明は部屋中に均一な照明レベルを与える。作業面において、300ルクスを確保する。明るさを調節できるように、窓近くの照明は日光センサーで制御する。

作業の明かりを確保するために、フロアライトを用意する。なお、そこに動線がないことを確認する。

ダイニングルームのできるだけ近くにトイレを置く。トイレのサインは床から1.2mの高さにする。悪臭がダイニングに漏れないように負圧を保ち、十分な換気をする。



日光を最大限取り入れ、人工照明を最低限にするために大きな窓を付ける。

イスの座面は床の色とはっきりと対比させる。肘かけがあればイスを動かすのが簡単になる。

どんな床材でも床の色を揃える。異なる床材でもちかい色を選ぶ

庭がよく見えるように、低い窓を設計する。窓の外部が大きな茂みや植物でさえぎられていないかチェックする。

つかみやすく、ドアと区別しやすいドアノブを高さおよそ1mの位置につける。

スタッフと入居者の交流を促すテーブル配置にする。理想的には、スタッフが入居者と同時に食べられるように、イスを追加できるとよい。

ダイニング

64

寝室

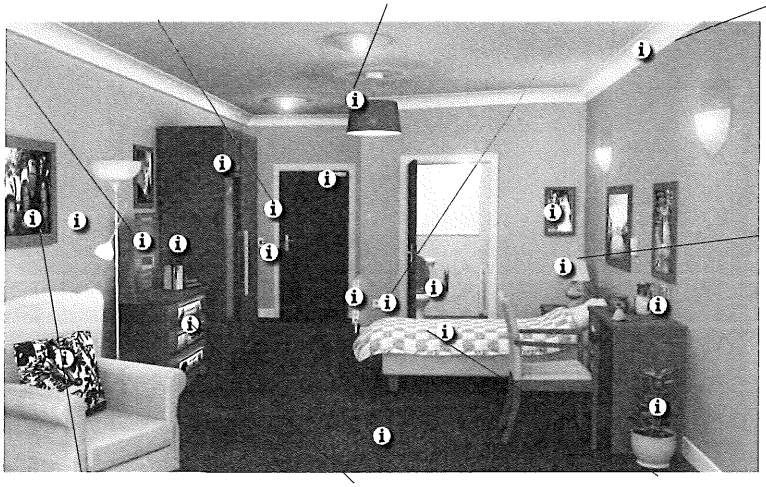
床面、壁、ドア、敷居の色は30LRVほどの色差をつける。大きな模様のカーペット・壁紙は避ける

最小200ルクス程度で調整可能な照明器具（非常灯含む）を設置する

ソケットとスイッチ板が周囲の壁色と30LRV以上のコントラストをつける。高齢者等でも使用可能な高さに取り付ける

家庭的に見せるために天井に周り縁を設ける。

どの鏡も必要に応じて簡単に取り外せる



局所的に照らすため、ベッドサイド照明を置く。200ルクス程度は必要

家庭的な雰囲気と記憶刺激を与えるために、個人の写真、絵、家具と装飾を配置する。写真等は床面から1.2m上に設置する。

援助なしで物を見つられるように、引き出しにラベル（文字・絵）をつける

ベッドカバーやクッションなどのような個人の家具を使用する。居住者の混乱を防止するために必要。

65

売店

店だと明確に認識できるようにコントラストの大きな配色にする。

サインと背景はコントラストをつける

整理されたシンプルな配置とすることで、買いものしやすくなる

支払う場所が分かりやすいこと。壁を背にすることで店員を見つけやすい。レジは見やすく、支払額が分かりやすいこと。支払いの間、レジのそばに、ハンドバッグや杖を安全に置いておける場所があること。

利用者の年齢および売れ筋に考慮した製品を置く

手すりを設置することで、身体的にも、方向感覚のうえでも、店への誘導を助ける。
高齢者には90cmの高さが望ましい。

大きなはっきりしたアナログ時計が分かりやすい。カレンダーも役立つ

オープンな配置は、患者が中を見やすく店に入りやすい。ガラスのショーウインドウは、店であることを認識させる。

床と壁の色にはコントラストをつける

体が不自由な人、動きにくい人のために手すりを設ける

商品やサインにはしっかりと照明を当てる。視線が低くなる高齢者に適した位置に配置する

通路と店の床はほとんど差をなくす、もしくは全く違いを設けてはいけない。敷居を使場合も、床と同系色にする。

柄のある床材は用いない

天井、床、床材は会話が聞き取りやすくするため、吸音性の高い材料とする

66

日本でも幾つかの興味深い事例がある

67

日本での実践例

鹿児島　NAGAYA TOWER（厳密には一般賃貸）

写真は大月敏雄教授提供

NAGAYA TOWER
ちょっとかわった賃貸住宅

3-6階　賃貸住宅（大きな住戸から小さな住戸まで）

2階　シェアハウス（年代を問わない）

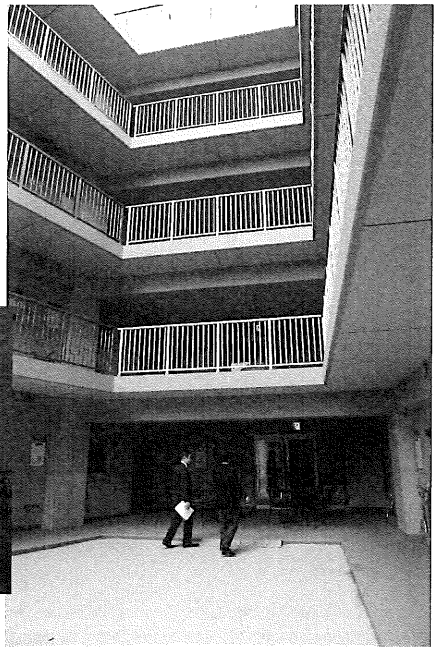
1階　コンビニ・障がい児保育・カフェ・ネイルサロン

国交省の補助事業に選定された

68

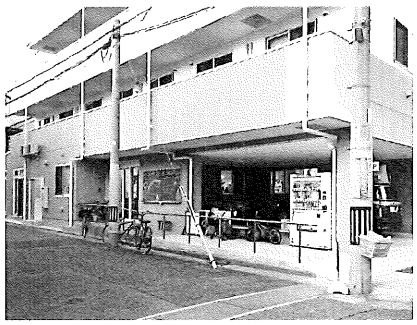
2 階のコモンリビングの上は中庭
3 階以上は多様な賃貸住宅

2 階のコモンリビング
キッチン・ダイニング・リビング・ピアノ
3 階以上の人も利用可



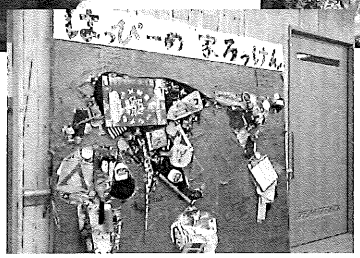
69

はっぴぃの家ろっけん（神戸長田区）



70

多世代共生



71

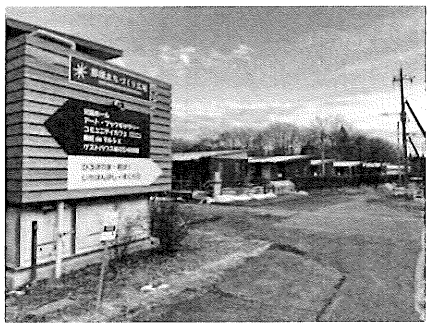
少子高齢社会の小さな拠点

那須まちづくり広場

共生型コミュニティが誕生しました！

2020年　地域づくり表彰【小さな拠点部門】国土交通大臣賞受賞
2022年　ふるさとづくり大賞　団体表彰（総務大臣表彰）

那須まちづくり株式会社



おしきせでない持ち寄り型コミュニティ

72

Ⅶ　包括的居住支援について

・高齢者住宅の在り方を考える上で、従来型の高齢者施設、老人ホームなどから高齢者専用の住宅を構想するだけでなく、幅広い思考が必要となってきている。少子化や家族形態、機能の変貌をふまえ、「ごちゃまぜ型」居住、「コモンズとしての居場所」などとの関わりを考えていく必要も‘ある。

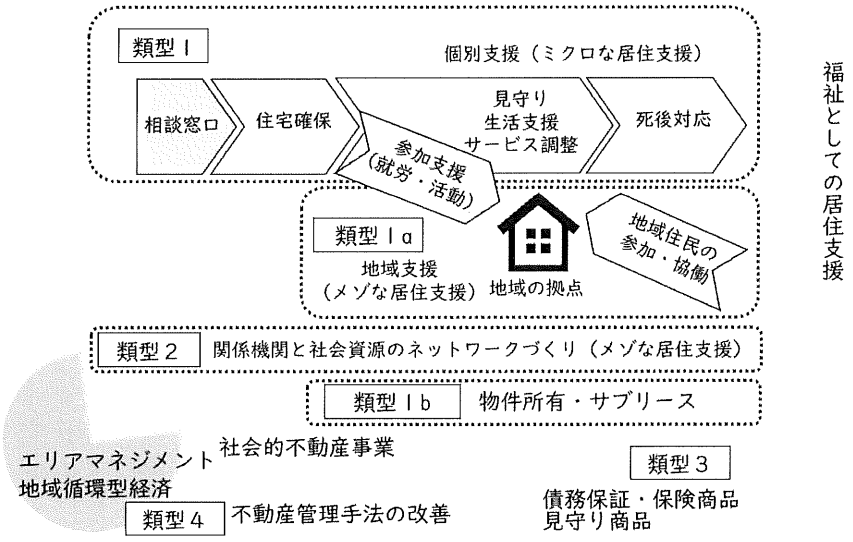
・前に紹介した、多様な事例についてもう一度その意義を考えていただきたい。さらに居住支援の構成について、井上由起子先生が作成された図で理解を深めていただきたい。

・とすると、小山剛の仕事がいかに先駆的であったかを改めて実感する。

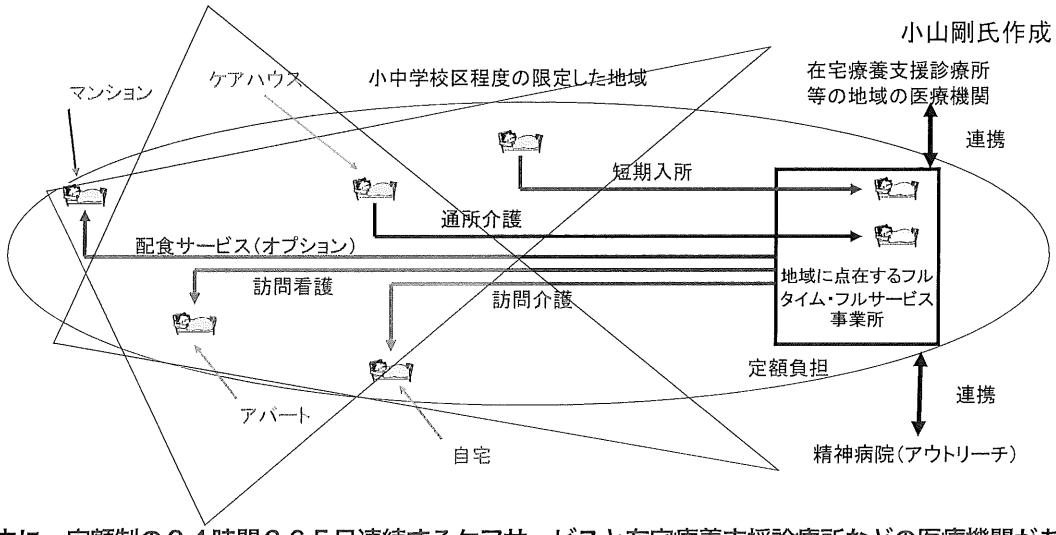
・かれは、経済学者シュンペーターという「新結合を発明する」イノベーターであった

73

居住支援の構成（井上由起子による）



74



暮らしの中に、定額制の２４時間３６５日連続するケアサービスと在宅療養支援診療所などの医療機関があれば、施設や病院に行かなくても生活支援は可能（施設の箱をはずして、機能を地域に展開すること）

地域包括ケアシステム

認知症に対する診断・治療とフルタイム・フルサービスが連携すれば認知症の高齢者も地域社会で生活できる

75

Ⅷ　災害への対応

コミュニティ型仮設住宅について
小山剛と大月敏雄の実践によせて
平時の居住と非常時の居住

76

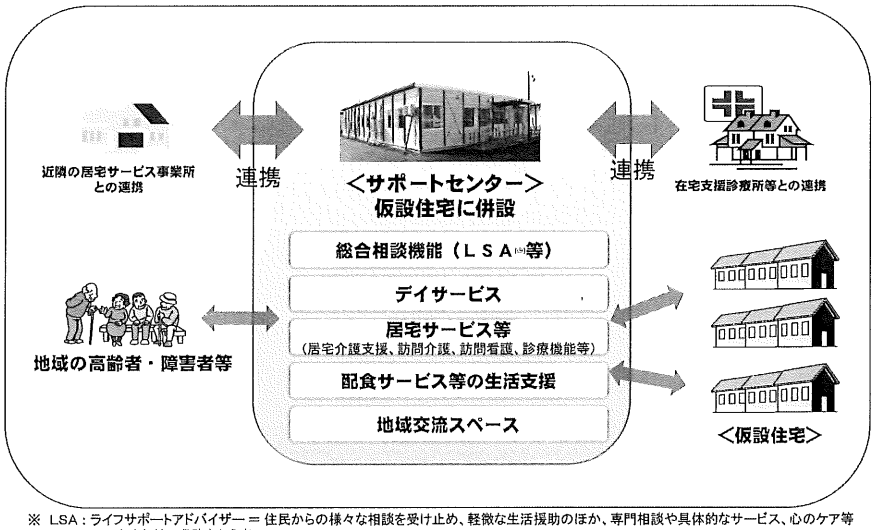
生活支援の基本的考え方とサポートセンターの構想

家族介護から社会介護に変化したのだから、連続的な支援体制が無ければ絵にかいた餅にしかならない

77

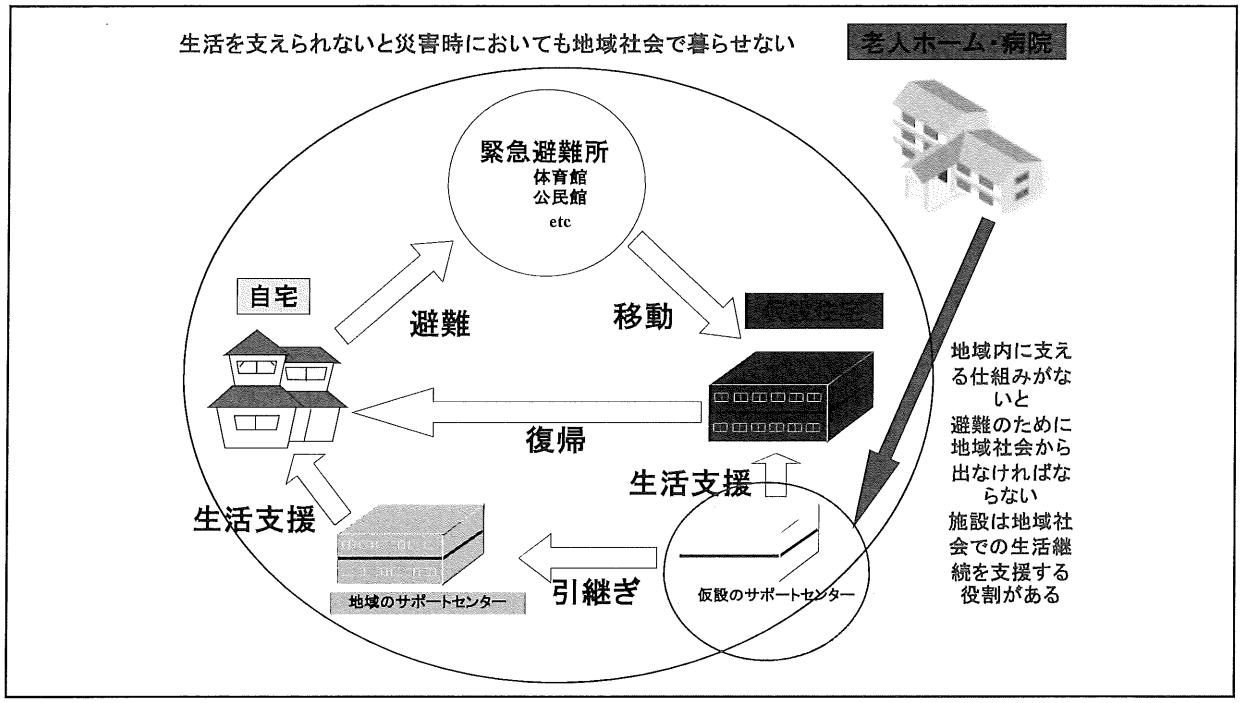
別紙1

仮設住宅に付設する介護等のサポート拠点について（イメージ）

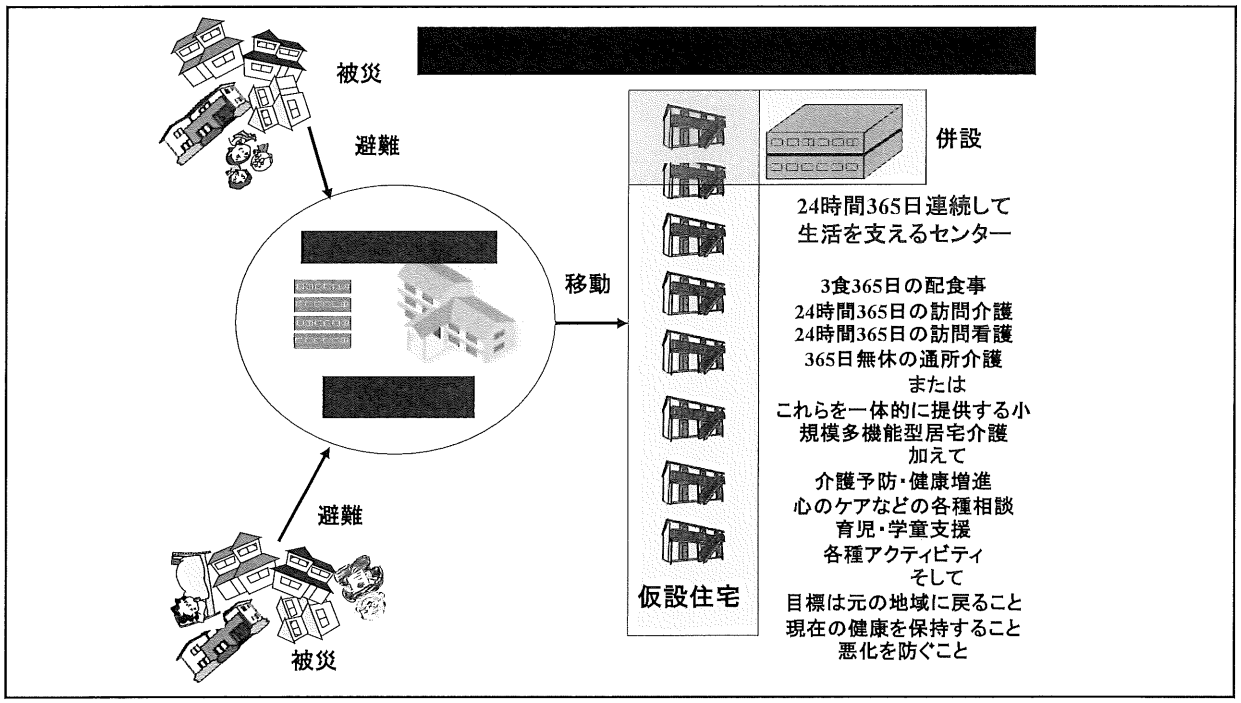


※ LSA：ライフサポートアドバイザー ＝ 住民からの様々な相談を受け止め、軽微な生活援助のほか、専門相談や具体的なサービス、心のケア等につなぐなどの業務を行う者

78


生活を支えられないと災害時においても地域社会で暮らせない
老人ホーム・病院
緊急避難所
体育館
公民館
etc
自宅
避難
移動
復帰
生活支援
生活支援
地域のサポートセンター
引継ぎ
仮設のサポートセンター
地域内に支える仕組みがないと
避難のために地域社会から出なければならない
施設は地域社会での生活継続を支援する役割がある

79


被災
避難
移動
避難
被災
併設
24時間365日連続して
生活を支えるセンター
3食365日の配食事
24時間365日の訪問介護
24時間365日の訪問看護
365日無休の通所介護
または
これらを一体的に提供する小規模多機能型居宅介護
加えて
介護予防・健康増進
心のケアなどの各種相談
育児・学童支援
各種アクティビティ
そして
目標は元の地域に戻ること
現在の健康を保持すること
悪化を防ぐこと
仮設住宅

80